

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00571

研究課題名（和文）北西カフカース諸語とバルト・スラヴ語のアクセント法の対照研究

研究課題名（英文）Contrastive Studies on the Northwest Caucasian and Balt-Slavic Accentuation

研究代表者

柳沢 民雄（YANAGISAWA, Tamio）

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：80220185

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は北西カフカース諸語とバルト・スラヴ語の間のアクセント法の共通原理を解明することである。以下の2つの課題を解明した：

（1）両語派はかつて各音節に優性と劣性という2つのアクセント属性をもっていた。（2）このアクセント属性は日本語のような言語に存在する音調体系に由来する。

両語派は後に音調言語から強さアクセント言語に変わった（バルト・スラヴ祖語において、V. A. Dyboによってそれは再建されている）。この仮説は中国語の一方言である東干語のような語アクセントの位置が音調によって予測できる言語が存在する、という事実によって言語類型論的に確認できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

語アクセントの最も重要な機能の1つは、語をひとかたまりにすることにある。もし日本語にアクセントがなかったならば、語がどこで切れるのかわからず、伝達に障害をきたすであろう。本研究では北西カフカース諸語とバルト・スラヴ語のアクセントについて研究した。これらの言語のアクセント法を歴史的に検討すると、最深層の祖語において日本語と同じ高低アクセントが仮定された。それが後に強さアクセントに変化した。音調言語から強さアクセント言語に、さらに音調を獲得するといった変遷が仮定できる。日本語のアクセントも変化を免れない。これがどう変化するかを探るためにも本研究は役立つだろう。

研究成果の概要（英文）：The aim of the present study is to elucidate the common principle of accentuation between Northwest Caucasian and Proto-Balt-Slavic. I elucidated two main topics:

(1) the two language-branches had two accent properties of dominant and recessive on every syllable, and (2) the accent properties may derive from a tonal system in languages such as Japanese. The tonal system of the two language-branches changed into the stress accent system, which is reconstructed by V. A. Dybo in Proto-Balt-Slavic. This hypothesis is assisted by the fact that there is such a language as Dungan a dialect of Chinese, in which the position of word stress is predictable by tones.

研究分野：言語学

キーワード：アクセント バルト・スラヴ語 北西カフカース諸語 リトアニア語 ロシア語 セルビア・クロアチア語

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初までに行われていた研究は、まず、北西カフカース諸語に属するアブハズ語 (Abkhaz) の記述と北西カフカース諸語の類型論的研究である。この研究成果として、研究成果公開促進費によって2冊の書籍に纏め、アブハズ語の辞書と文法として出版した (T. Yanagisawa (2010) *Analytic Dictionary of Abkhaz*. ひつじ書房; Yanagisawa (2012) *A Grammar of Abkhaz*. ひつじ書房)。この過程でアブハズ語の名詞と動詞複合体のアクセントについて詳細に記述した。また、私は長年バルト・スラヴ語の歴史的アクセント研究を続けてきた。最近のバルト・スラヴ語アクセント論において、形態素レベルで優性 (dominant) と劣性 (recessive) と名付けられるアクセント属性が存在することが明らかになってきた。すなわち、語アクセントの場所はこのアクセント属性の配列に拠っていることが明らかにされた。これは例えば、ロシアのスラヴ語アクセント研究の第一人者である、Дыбо (1981) によってスラヴ祖語の派生語を使って明らかにされた。それによればスラヴ祖語においてアクセントの特徴に関して2種類の形態素を分けることができる。すなわち、アクセントを引きつける優性形態素 (+記号で記す) とアクセントを引きつけない劣性形態素 (-記号で記す) である。これらを「アクセント属性」と呼ぶならば、語アクセントはアクセント属性の配置において決まるとする。スラヴ祖語では、アクセント属性の配置と実際に顕現するアクセントの位置は次のようになる: アクセントは最初の優性形態素列の最初の形態素の上に置かれる: 例えば、 $^{1}+++ - - +$, あるいは $- - ^{1}+ - +$ (1 は強さアクセントを表す)。最初の例は優性形態素列 (+ + +) の最初の形態素にアクセントが置かれる。2番目の例では最初の劣性形態素列を飛び越えて、優性形態素列 (+ +) の最初にアクセントが置かれる。これはスラヴ祖語だけでなく、ソシュール (Saussure 1896) が発見したように、リトアニア語にも当てはまるアクセント原理である (恐らく、バルト祖語にも仮定できる)。

一方、アブハズ語のアクセントを調査した結果、上のバルト・スラヴ語のアクセントと類似の原理が名詞においても働いていることが明らかになった。アブハズ語は北西カフカース諸語に属する言語であるが、これに属する言語には、さらにアディゲ語 (Adyge) と死語であるウビフ語 (Ubykh) がある。ウビフ語はアブハズ語と同様に自由な強さアクセントを有している。他方、アディゲ語はすでに固定アクセント化されており、我々にとって資料的な価値はほとんどない。アブハズ語の資料から、恐らく北西カフカース祖語のアクセント原理は次のようであったと推測できる: 各音節には優性と劣性の2種類のアクセント属性が存在し、強さアクセントを決める原理は次のようであった: 最初の優性音節列の最後の優性音節の上に強さアクセントは置かれる。例えば、 $++^1+ - - +$, あるいは $- - +^1+ - +$ 。最初の例では、最初の優性音節列 (+ + +) の最後の優性音節の上にアクセントが置かれ、2番目の例では、劣性音節列を飛び越えて、最初の優性音節列 (+ +) の最後の優性音節の上にアクセントが置かれる。

これらの2つの語派に見られるアクセント配置原理はある違いを持ちながらも、共通の原理を持っている。つまり、形態素と音節との違いはあるが、それらに2種類のアクセント属性を仮定し、その配列の最初の優性の形態素列あるいは音節列の上に強さアクセントが現れる、というものである。こういった理論的な要請によって作られた仮説は、実際に何らかの音声的現実を反映したものを見なさねばならないだろう。そこで研究の目的は、世界の諸言語の中で我々が扱っている言語のアクセント原理を反映するものを探し出すこと、そしてそういった言語のアクセント法がどのように我々が扱う言語のアクセント法に変化するのかを明らかにすることであった。

2. 研究の目的

上で述べたようにバルト・スラヴ語と北西カフカース諸語といった、全く系統を別にする言語において、類似のアクセント原理が働いていることは、これが何らかの一般的なアクセント原理によっている可能性を排除するものではない。我々が扱っている言語のアクセント原理は実際のアブハズ語とバルト・スラヴ語の資料から作られたものであり、理論的な要請によって作られた仮説である。しかしこの抽象的な仮説は、実際の言語のなかでの音声的現実を反映したものと見なさねばならないだろう。すなわち、我々の扱っている言語のアクセント原理は、世界のなかの実際の言語のアクセント法から由来したものであると推測できる。本研究の最も魅力的な目的の1つは、我々の扱っている言語のアクセント原理がどのような言語のアクセント組織 (韻律的特徴も含めて) から由来したのかということ、そしてその変化のプロセスの探究である。

実は、このアクセント原理は、恐らく音調言語に見られる原理に遡ると仮定することができる。日本語東京方言のような高低アクセントをもつ音節の配置は、我々がバルト・スラヴ語と北西カフカース諸語の対照によって仮定したアクセント原理にかなり近い。例えば、東京方言の声の高 (H) と低 (L) のモーラを参照: kabuto (HLL), kokoro (LHL), uguisu (LHLL), karakasa (LHHL)。金田一春彦 (1967) は低モーラの前の高モーラの列の最後には音調的に下がる「滝」(音声学でいう「ダウンステップ」) があると言う。この「滝」のあるモーラを強さアクセントのある音節と見なし、高と低のモーラをアブハズ語の優性と劣性のアクセント属性のある音節とそれぞれ見なせば、これはアブハズ語のアクセント原理に類似していることは明らかである。従って、研究の

目的は類型論的にこの音調言語から強さアクセントへの変化を仮定できるような言語の探究とそのプロセスの解明である。

さらに本研究の目的は、スラヴ祖語におけるアクセント体系が個別のスラヴ諸語に変化した際に見せる、アクセントの質的な変化に関する考察である。特に我々が注目すべきは韻律的特徴をもつスラヴ祖語（ここでは当然にバルト語も考慮しなければならない）のアクセント体系が、東スラヴ諸語とブルガリア語に生じたような、自由アクセントを有しながらも強さアクセントに変化した原因とプロセスの解明である。この東スラヴ諸語とブルガリア語に生じた自由な強さアクセントへの変化は、上で述べたバルト・スラヴ語と北西カフカース諸語に見られたアクセント原理の起源の問題とも関連する。それは上の研究目的と一致するものであるが、ここではスラヴ祖語（あるいはバルト・スラヴ祖語）からロシア語あるいはブルガリア語へのアクセント法の変化を解明することが目的となる。

3. 研究の方法

研究方法は主として2つの分野を対象とする：

(1) 北西カフカース諸語については、ウビフ語のアクセントを Dumézil (1975)、その他のウビフ語資料と Vogt (1963)のウビフ語辞典によって調査する。名詞のアクセント法を中心に調査し、これをアブハズ語のアクセント資料と比較し、北西カフカース祖語におけるアクセント法を解明する。動詞についてもアクセント法を調査すべきであるが、アブハズ語もウビフ語はいずれも複統合語であるために、基本的な動詞構造にのみ限定してアクセント法を調査する。

(2) バルト・スラヴ語については、アクセント論において最も重要な言語のみを調査研究する。まず、バルト語はリトアニア語と古プロシア語を中心に調査することとした。リトアニア語はアクセント論にとって最も重要な言語なので、これは今までの諸研究から得られた資料を纏めるとともに、名詞について Robinson (1976)の『リトアニア語逆引き辞書』を使って曲用とアクセントとの関連を辞書形式に纏める。古プロシア語に関しては、この言語が死語でありかつアクセント記号が付されていないために、アクセントがどこにあったかは今でも議論されている。我々はこの問題について基本に戻って、これを Trautmann (1910)の考えから再考しようとした。即ち、起源的に同じ語のアクセントが、Trautmann が仮定するアクセント位置とリトアニア語のアクセント位置が同じであれば、それをバルト祖語のアクセント位置であると仮定した。

スラヴ諸語に関しては、スラヴ祖語の韻律的特徴を最もよく保持しているセルボ・クロアチア語のアクセント法を、主としてアカデミー版の 23 巻本の『セルビア・クロアチア語辞典』と Matešić (1970)、及び Matešić の逆引き辞典とを使って調査し、名詞のアクセント移動を記載した語彙集を作成する。これはロシア語やリトアニア語のような名詞のアクセント移動タイプを網羅する辞書がないためである。一方、もう1つの重要な資料であるロシア語アクセントに関しては、アクセント・パラダイム形式(AP a, AP b, AP c)のなかにスラヴ祖語の韻律特徴が残存しているので、14 世紀の最も古いアクセント資料を使ってこのパラダイム形式を調査する。その他のスラヴ諸語については、我々の研究に関わる場合に限り調査することにした(例えば、チェコ語の延長母音をもつ形式、ブルガリア語の冠詞をもつ場合など)。

最後に上の(1)と(2)を対照することにより、北西カフカース祖語のアクセント原理とバルト・スラヴ祖語のアクセント原理の共通性を明らかにする。それとともにこのようなアクセント原理が実際の音声的事実を反映したのみならず、類型論的な観点からこのようなアクセント特徴の起源と仮定される言語を探る。

4. 研究成果

本研究成果は次の(1)(2)(3)の3点である：

(1) 北西カフカース諸語に関しては、アブハズ語のアクセント属性をより利用可能な姿で提示すべく、名詞の派生形を中心にこれを纏めた。この作業により派生形のアクセント属性によるアクセント付与の原理は一部の例外はあるものの、概ね一貫していることが明らかになった。例えば、¹a-mca-bz [¹+ - - - -] 'flame' (< ¹a-mca [¹+ - - -] 'fire', ¹a-bz [¹+ - - -] 'tongue'), a-c^w1a-j-žj [¹+ ¹+ - +] 'body' (< a-c^w1a [¹+ ¹+] 'skin', jə [-] 'and', a-žj1ə [¹+ ¹+] 'flesh')。またウビフ語の資料を使って動詞のアクセント法を調査した。これをアブハズ語のアクセント法と比較した。これによってウビフ語の動詞アクセント法についてもアブハズ語と同じ原理が働いていることが明らかになった。例えば、語根 bya 'see' が + のとき：Ubykh wə-z-by¹a-n [- - ¹+ -] 'I see you', cf. cf. Abkhaz bæ-z-b¹a-jt' [- - ¹+ -] 'I saw you'。語根 t'ə 'give' が - のとき：Ubykh a-w¹ə-s-t'ə-n [- ¹+ - - -] 'I give it to you', cf. Abkhaz b-r¹ə-s-ta-wa-jt' [- ¹+ - - + -] 'I give you to them'。

(2) バルト・スラヴ語に関しては、バルト語とスラヴ語に分けて成果を述べる。

1. バルト語の内、リトアニア語のアクセント法はかなり研究がなされているので、ここでは名詞と動詞の基本語のアクセント法を曲用変化と関連させながら、Robinson の『リトアニア語逆引き辞書』を使って調査した。例えば、移動アクセント型と多音節語のアクセントにおいて、語中アクセントと語末アクセントとの移動する語(septini タイプ)が存在するのかどうか、などを示すアクセント語彙集を作成した。これによって基本語のアクセント移動特徴がかなり簡単に調べることが可能になった。古プロシア語のアクセント法については、上で述べたように Trautmann (1910)の考えがリトアニア語のアクセント法からみて正しいかどうかを、最近出版された古プロシア語の語源辞典である Maziulis (1988-1997)を利用して確認した。Trautmann の考えるアクセン

ト位置は、『第三教理問答書』の訳者である Abel Will の序文の考えを基本とする。我々が調査した結果は古プロシア語の macron 記号とリトアニア語のアクセント位置は概ね一致していることが分かった(しかし Trautmann が古プロシア語にもソシュールの法則が働くとする考えは間違っていると私は見なした)。

2. スラヴ語の内、ロシア語については次の成果が得られた。14 世紀の最も古いアクセント資料を基にして、古代ロシア語の名詞のアクセントタイプ(スラヴ祖語と同じく 3 つに分類される)を纏めた。これを現代ロシア語の名詞のアクセントタイプ(10 種類のアクセントタイプがある)と関連させ、これがどのようにして現代に変化したのかを明らかにした。例えば、現代ロシア語では単数形で語尾アクセント、複数形では語根アクセントである d 型の名詞(женá)は、古代ロシア語の語尾アクセント型(APb)から 19 世紀になって d 型に変化したことを示した。本研究はロシア語のアクセント史を専門に行うのでないために、詳細な調査は行わなかったが、ロシア語アクセント史の中で多くのアクセント型の変化は、18-19 世紀に起こっていることが明らかになった。

セルビア・クロアチア語は本研究で重点を置いた分野である。上での述べたようにロシア語とリトアニア語については、アクセントの移動や音調が載せられている辞書があるために、名詞のアクセント型を調べることはかなり容易である。しかしセルビア・クロアチア語に関してはこのような簡便な手段はないのが現状である。シト方言のような標準語の基になった方言のアクセント記述に関して、正書法辞典やアカデミー版の 23 巻本の『セルビア・クロアチア語辞典』においてさえ、全ての格形のアクセントは不十分にしか記述されていない。このために私は Matešić の資料を用いて、基本的な 2 音節語を中心にして名詞の全変形形のアクセントを記したアクセント語彙集を作成した。そこでは 33 に分類したアクセント型を記してある。これとチャ方言の資料、および古代ロシア語のアクセント資料を基に、スラヴ祖語のアクセント法を再建した。

(3)最後に上の(1)と(2)を対照することにより、これらのアクセント属性をより類型論的に確認した。このアクセント属性によるアクセント原理が如何なる音声的事実から由来するかを探究する中で、音調言語から強さアクセントへの移動過程にあると思われる言語を発見した。それは中国語の甘肅・陝西方言の一方方言である、ドンガン語(東干語)である。ドンガン語を調査した Драгуновы(1937)によれば、この言語には声調と強さアクセントが存在し、語内部のアクセント配置は、普通、声調に条件付けられている。これについてドラグーノフ夫婦は次のように書いている:「中国語と同様に東干語は音調(тон)と強さアクセントの存在に特徴がある。しかし中国語 —そこではアクセントは声調(интонация)に依存せずに、独自の単位であるが—と異なり、東干語においては語内部のアクセントの配置は、普通、声調に従っており、声調に条件付けられている。この事実は重要である。というのは声調の違いが重要性を失い、そしてアクセントの場所の違いに取って代わられる寸前にあるからである。」(Драгуновы, *ibid.* 122-123) ドンガン語の声調と強さアクセントの状態は、我々が研究してきたアクセント原理の音声的事実を示唆してくれるものである。つまり、アブハズ語型の強さアクセント(北西カフカース祖語では優性と劣性の音節をもつと仮定される)は、本来は東京方言のような音調言語であったことを仮定させる。優性と劣性の音節の組み合わせによって強さアクセントの位置が決まるとするのは、ドンガン語のアクセントの場所の決め方と一致しているからである。バルト・スラヴ祖語における優性と劣性の形態素も、これが音調を反映したものであると仮定される。これは後に強さアクセントに変わった。その後さらにそれらの形態素に二次的な音調が発生した。それが今日のリトアニア語とセルビア・クロアチア語に残存しているのである。スラヴ祖語末期にみられる音調とアクセント・パラダイムの一対一の関係は、東スラヴ諸語とブルガリア語では自由な強さアクセントに変わった。この変化は、Jakobson(1929)が仮定するように、子音の軟音性と音調との非共存によるものであろう。

最後に本研究の研究期間中に上で述べた研究の他に、最初の年度の数ヶ月を使って 2015 年から 2017 年度の科研費の研究「カフカース諸語とロシア・ソヴィエト言語類型論の研究」(基盤研究(C) 15K02513)で行ってきた、Dixon(1994) *Ergativity* の翻訳の校正作業を行った。この翻訳は共訳のかたちでデクソン著『能格性』(研究社)として 2018 年に出版した。

引用文献

- Драгуновы, А. и Е. (1937) Друганский язык. *Записки института востоковедения академии наук СССР*. VI. Москва-Ленинград. С. 117-131.
- Dumézil, G. (1975) *Le verve Oubykh. Études descriptives et comparatives*. Paris: Klincksieck.
- Дыбо, В. А. (1981) *Славянская акцентология*. Москва: Наука.
- Jakobson, R. (1929) Remarques sur l'évolution phonologique du russe comparée à celle des autres langues slaves. *TCLP*, II. Prague.
- Matešić, J. (1970) *Der Wortakzent in der serbokroatischen Schriftsprache*. Heidelberg: Carl Winter.
- Mažiulis, V. (1988-1997) *Prūsų kalbos etimologijos žodynas*. 1-4. Vilnius: Moskslas/Mokslo ir enciklopedijų leidykla.
- Robinson, D. F. (1976) *Lithuanian Reverse Dictionary*. Columbus: Slavica Publishers.
- Saussure, F de (1896) Accentuation lituanienne. *IF* VI. Anzeiger. 157-166.
- Trautmann, R. (1910 [1970²]) *Die altpreußischen Sprachdenkmäler*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Vogt, H. (1963) *Dictionnaire de la Langue Oubykha*. Oslo: Universitetsforlaget.
金田一春彦(1967) 『日本語音韻の研究』東京堂出版.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 柳沢民雄	4. 巻 18
2. 論文標題 ロシア語の chaj「茶」の末尾要素 j について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 155-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柳沢民雄	4. 巻 5
2. 論文標題 ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 類型学研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柳沢民雄	4. 巻 19
2. 論文標題 ソシュールは「ソシュールの法則」を発見したのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 R. M. W. ディクソン（柳沢民雄・石田修一訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 342
3. 書名 能格性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------